

「大宮盆栽村100周年に向けた研究ノート」  
④ 雑誌から見る団子坂時代の盆栽園

大宮盆栽村を開村した清大園や薫風園、薫風園は、現在の東京都文京区千駄木の団子坂周辺で営業していた盆栽園です。大宮に移転する前の盆栽園の様子は、『盆栽専門誌『盆栽雅報』(盆栽同好会発行、明治39年〜大正6年)や『東洋園芸界』(東洋園芸会発行、明治41年〜大正7年頃)に見ることが出来ます。今号では、団子坂時代の薫風園(初代蔵石光三郎)や清大園(二代清水利太郎)に関する記事から、盆栽園による陳列会の活気が江戸時代以来団子坂の名物として人気を博した菊人形の盛衰とともにあったことを見ていきます。

まず、早い時期の記事として、明治39年11月10日発行の『盆栽雅報』7号では、薫風園で開催された第6回盆栽同好会の陳列について、「時は恰あたかも団子坂は菊人形の見せ物興行中で、女子供の遊び場所に恰(こう)当(とう)である為め、夥(おびただ)しき人出あり、其余

波は同好会にも及びて、会員以外の来観者が頗る多つた」と記されています。また、『東洋園芸界』10月の巻(明治41年11月20日)では、前月に開催した薫風園の山草会(山野草の陳列会)について、「折柄この日団子坂菊人形の会場に相当せることゝて来館者殊に多」かつたと記されています。明治40年前後の秋の団子坂は、菊人形を目当てにした訪問者が多く、その影響で陳列会も賑わっていた様子が見えがえま。

明治42年以降の記事には、団子坂下の各園を会場とした月例の盆栽や書画、骨董の陳列会(楽天会)の様子が記されています。例えば、『東洋園芸界』第2年10月の巻(明治42年10月20日)によると、「団子坂なる楽天会盆栽書画骨董陳列会は本月九、十両日各自々園に、盆栽書画を陳列し恰(あまね)く衆庶の観覧に供」され、清大園や、陽春園、薫風園、古松園、苔石園、雲樹園、太樹園、草樹園な

た陳列を行う月例の「談娯会」を新たに組織しました。

ちなみに、団子坂の菊人形の衰退については、日本園芸中央会が刊行する『日本園芸雑誌』(明治38年〜昭和20年頃、『日本園芸雑誌』)



盆栽同好会のメンバー『盆栽雅報』第1号(明治39年5月10日)掲載

芳樹園 清大園 岩崎園 香樹園 百草園 上島唯三 苔香園 薫風園 松花園

本園芸雑誌』明治22年〜明治38年の後継)の同時期の大正2年1月の記事でも触れられています。それによると、「団子坂の菊と云へば、秋季行楽の随一として市民が一日の清遊を擅にし来りしもの」でしたが、両国の国技館で大規模な菊花壇などの催しが行われたことで、「昨年の如きは全く

どが参加しました。楽天会は薫風園や清大園をはじめとした盆栽園だけでなく、骨董家も参加し、20園以上で開催することもあり、時には陳列を競つこともしています。『盆栽雅報』によると、明治44年8月と9月、明治45年新春に開催した会では、特に薫風園の陳列が賑わっていたようです。

しかし、大正時代になると、団子坂の賑わいに陰りが見え始めます。『盆栽雅報』82号(大正2年2月10日)では、楽天会について「例の通り第二の土曜日曜に本年の初会を団子坂下薫風、苔石其他各自園で開催したが、何れも甚しく振はない、けれどもまあ薫風園が一番である」と、その不振ぶりが書かれています。このように活気が失われつつある団子坂でしたが、同誌83号(翌3月10日)では、盛り返しを図る様子が見られます。団子坂は「秋の菊人形廃滅して、江戸の名残の一名所まさに亡びんとする折柄」にあ

団子坂の菊人形の催しは廃れ果て廃業せざるを得ない状況になり、菊人形だけでなく植木業をやめる者もいたといえます。また、『日本園芸雑誌』の同記事によると、地価高騰による広い敷地の維持困難や、戸塚などの郊外に新興の植木屋が生まれたことも衰退の要因となったようです。

このような困難な時期に結成された談娯会は、楽天会と連合して翌年以降も開催されていましたが、賑わいぶりを伺える記事はほとんどなく、団子坂の盆栽園がその後どのようなようになったのかは、雑誌からは伺えませんでした。

このように、菊人形の衰退と共に陳列会の活気も移ろい、地価の高騰や新興勢力の誕生といった様々な要因に翻弄されながらも、有志が団結して地域を盛り上げようとする団子坂の姿が雑誌を通して見られました。今後も調査研究を進めることで、大宮盆栽村に移転した盆栽園の東京時代の姿を少しでも明らかにできることを期待しています。

(当館主事 立石見雪)